

1924－30年の詩における T. S. エリオットの調和的思考

古賀元章

はじめに

“The Love Song of J. Alfred Prufrock” (1910－11) から *The Waste Land* (1922) までの T. S. Eliot (1888－1965) の初期の詩では、人間の退廃や墮落が語り手たちの風刺や歴史的感覺などを交えた言動を通して描かれている。1924－1925年の詩では、エリオットの人生の行き詰まりが反映されて、人間の退廃や墮落の様相が以前よりも強調される。1927年、彼は英国国教会へ入信する。この入信をきっかけにして、以後4年間の彼の詩が人間の精神的再生を前面に出した表現内容となる。

ここで1924－30年の詩に目を向けると、エリオットは3人一父親 Henry Ware Eliot, Sr. (1843－1919)、母親 Charlotte Champe Eliot (1843－1929)、妻 Vivienne-Haigh Wood (1888－1947) を視野に入れて詩作している。その詩作の特徴は、彼がこれら3人に対する罪を意識して、新たな人生を再出発することである。そこには、母親を中心とした静寂な世界の形成を目指した彼の調和的思考が認められるように思われる。本稿では、このような調和的思考がどのように展開されているのかについて論述したい。

1

1924年11月の *Chapbook* にエリオットの “Doris’s Dream Songs” が発表される。その詩では次のような表現が書かれている。

Eyes that last I saw in tears
Through division
Here in death’s dream kingdom
The golden vision reappears
I see the eyes but not the tears
This is my affliction (36)

語り手は相手との別れを思い起こしている (Scofield 138)。彼が涙を流して見た “Eyes” は、愛した女性の目を暗に示唆している。“death’s dream kingdom” から察して、彼が彼女と一緒に住んだ2人の世界は、心の満たされない死のような状態であったと判断される。ところが、黄金のヴィジョンが再び現れたとき、彼はそのヴィジョンにある “the eyes” を見る。この「目」は、愛した女性の目とは違うのである。彼は “division” を介して、現実の世界から離れて別の異なる世界に思いを寄せている。それは、彼が悩んだあげく彼女と別れ

ることを意味する。

1925年1月の *Criterion* にはエリオットの “Three Poems” が見られる。その詩の第2連は、“Doris’s Dream Songs” から引用された詩行を記載している (170-71)。同年3月の *Dial* には、彼の “The Hollow Men” が収められている。その詩も「目」を扱っている。同年に出版の *Poems, 1909-1925* に所収の “The Hollow Men” の第1、2、4連は、*Dial* からの詩で構成されている。

こうした詩作の経緯から、エリオットが「目」を強く意識していることは注目される。ここでは、“Doris’s Dream Songs” の詩行の表現内容に留意しながら、*Dial* で「目」に言及した次のような詩行の表現内容を考察してみよう。

The eyes are not here
There are not eyes here
.....
Sightless, unless
The eyes reappear
As the perpetual star
Multifoliate rose
Of death’s twilight kingdom

The hope only
Of empty men. (194)

日常の世界が、“Doris’s Dream Songs” の “death’s dream kingdom” から、“here” つまり “death’s twilight kingdom” に言い換えられている。日常の世界についてのこれらの表現は共に、活気のない死のような人間社会を示唆している。*Dial* の語り手は、このような人間社会の姿の中で、焼き付ついて離れない「目」を凝視する。その前提条件が “Sightless ... kingdom” という詩行である。この詩行は、中世イタリアの詩人 Dante Alighieri (1265–1321) の叙事詩 *Divine Comedy* の影響を受けている。この叙事詩は、*Inferno*、*Purgatorio*、*Paradiso* から成り立っている。Jain によれば (*A Critical Reading of the Selected Poems of T. S. Eliot* 208)、ダンテの場合、バラや生気のある星は聖母マリアとして描かれ (*Paradiso* 23)、また、“Multifoliate rose” は永遠の白いバラで、この聖母が祝福された人々のいる花びらの中心に座している (*Paradiso* 31)。浄罪界で理想の女性のベアトリーチェ (Beatrice) と再会したとき、ダンテは彼女の美しい姿に心を打たれて、過去の罪を改悛する (*Purgatorio* 30)。彼女は、彼が天国のヴィジョンを直視するための導き手の役割をしている。そこで、エリオットの詩の「目」は、ベアトリーチェのように語り手を導き、聖母マリアのように彼を救ってくれる理想の女性を象徴している。

Dial の “The Hollow Men” には “A penny for the Old Guy” (193) というエピグラフが付いている。このエピグラフに記された “the Old Guy” は、Guy Fawkes (1570–1606) を指している。カトリック教徒迫害の復讐をするため、彼は仲間たちと一緒に、国会議事堂を火薬で爆破しようとした。しかし、この企てが事前に発覚して、実行責任者の彼は 1605 年 11 月 5 日に逮捕され、翌年に処刑された。この火薬陰謀事件 (Gunpowder Plot) に因んで、イギリスでは毎年 11 月 5 日にガイの人形が夜に焼かれる。この日には花火を打ち上げるお金を集めるため、子供たちは “A penny for the Guy” と叫びながら、ガイに擬した人形を町中で引き回す (Southam 209)。エリオットの詩のエピグラフは、子供たちの言葉を借用したものである。そうすると、“The hope only / Of empty men” は、未遂に終わったガイ一味の事件を引き合いに出して、空しい社会に生きる人間たちが抱くはかない望みを表している。

ここで、その頃までのエリオットが直面していた人生の苦しみ的一端を検討してみたい。1914 年にハーバードから在外研究奨学金をもらい、彼はイギリスのオックスフォード大学で哲学を勉強する。しかし、懐疑的な性格の彼¹を悩ませる問題は、①哲学の勉強を継続すべきか、文筆活動をすべきか、②アメリカに帰国すべきか、イギリスに住むべきか、である。大学時代のクラスメートで詩人・小説家 Conrad Aiken (1889–1973) の紹介により、同年 9 月 22 日に彼は、イギリスで過去と現在を併置させた詩風を推進して、文学改革に乗り出していたアメリカ人の詩人・批評家 Ezra Pound (1885–1972) と出会う。以後、文学改革に激しい情熱を燃やす彼の姿に影響を受けて (“Ezra Pound” 327)、当地で文学の仕事することに決める (“To James Houghton Woods,” 10 July 1915, *Letters*, Vol. 1: 117)。この決断と連動して、エリオットはイギリスに定住する。その頃の彼は同国のヴィヴィアンと知り合い、両親に知らせず、1915 年 6 月 26 日に彼女と電撃結婚する。その彼女が神経症の精神的異常であったため、彼は結婚当初から彼女の看病と仕事 (ロイズ銀行に勤務、雑誌 *Criterion* の編集長) の両立に苦しんでいる。ついに彼は、妻との離別を考えるようになり (“To Bertrand Russell,” 7 May 1925, *Letters*, Vol. 2: 652)、彼女との結婚が失敗であったと告白する (“To Paul Elmer More,” 18 May 1933, *Paul Elmer More Papers* ²)。このような彼の心の痛みが、先の “Doris’s Dream Songs” の中の表現内容にすでに表されていたと思われる。1928 年の懺悔火曜日 (Shrove Tuesday) にアメリカの批評家・古典学者 Paul Elmer More (1864–1937) に書いた手紙の中で、彼は人間の幸福や人間関係の真っ直中に空虚さを感じる、と述べている。こうした彼の叙述は自らの虚無的な人生観を示唆して、その人生観がガイ一味の事件を踏まえた詩句 “The hope only / Of empty men” に反映されている。

こうして、当時のエリオットは人生と詩作の両面で行き詰まっていた。前者の姿は、“〈I am worn out. I cannot go on〉.” (“To John Quinn,” 12 March 1923, *Letters*, Vol. 2: 72)、とエリオットが書き綴っていることからうかがわれる。後者の姿は、“The Hollow Men” が最後の詩である、と彼が表明していること (“To Marianne Moore,” 31 Jan. 1934; Lehmann 5) からうかがわれる。

2

上述のように、エリオットにとって人生の行き詰りと詩作の行き詰りは密接に関連している。アメリカのエリオット家は、祖父 William Greenleaf Eliot (1811–1887) がセントルイスで熱心に伝道したキリスト教のユニテリアン派³である。内省的な孫のエリオットは、ユニテリアン派の子供として育てられたが (“To Sister Mary James Power,” 6 Dec. 1932; qtd. in Power 126)、この宗教の信仰に基づく行動規範を強要する家庭環境が重圧となったり (Powel 4)、この宗派を素直に受け入れることができなかつたりする (“[A review of] *Son of Woman: The Story of D. H. Lawrence*. By Middleton Murry” 771)。

これらの事柄と深くかかわっているのが、両親の期待に逆らった行為 (文筆活動、イギリス定住、同国のヴィヴィアンとの電撃結婚) であろう。⁴ そうした背信行為により、エリオットは両親に対する罪意識を抱いている。その罪意識の一端は、たとえば、彼が母親に送った手紙にある “There are so many things I don’t like to think of, because I think often that I used to be very selfish and self-indulgent in many ways, and quite unappreciative of your and father’s kindness and generosity.” (24 Oct. 1917, *Letters*, Vol. 1: 227) という文章から感じ取ることができる。1914年に渡英したとき、彼はイギリスの哲学者・批評家 T. E. Hulme (1883–1917) から罪意識のあり方を学んでいる。ヒュームは、フランスの社会主義者 Georges Sorel (1847–1922) の思想 (人間の性悪説、規律の力説) に共鳴して、人間の「原罪」説を主張する (“Translator’s Preface to Georges Sorel’s *Reflections on Violence*” 569-70)。エリオットは、少なくとも1915年にヒュームの存在を知っている (“To Mrs Jack Gardner,” 4 Apr. 1915, *Letters* 102)。以来、彼はこの「原罪」説に賛同して、⁵ ヒュームを20世紀の新しい精神態度の先駆者として高く評価するのである (“A Commentary” 231)。

エリオットは、ヴィヴィアンが所有する *Poems, 1909-1925* に、彼女ならばこの書物の内容を本当に理解してくれるであろうという献辞を書いている (Ackroyd 159)。その献辞から察すると、妻と別れることを考えながらも、自分の歩んできた人生を彼女にわかってもらいたいという彼の胸の苦しみが読み取れるであろう。そこには、これまで夫として彼女に十分に対応できなかったことへの彼の罪意識が感じられるように思われる。

1927年、エリオットは中庸を標榜する英国国教会⁶に入信する。この宗教が、両親や妻に対して、彼の心に芽生えていた罪意識に対応してくれると判断したからであろう。そこには、人間関係や物事の調和を図ろうとする思考が見られる。このような調和的思考には、子供時代の生活や古代ギリシャの哲学者 Heraclitus の影響が認められよう。この影響について以下で論考したい。

スミス・アカデミー (Smith Academy) に通っていた少年エリオットは、1899年に未発表の私的な雑誌 *Fireside* を発行している。そこには、“T. S. Eliot / T. S. Eliot Company / St. Louis” と記されている (Soldo 13)。この雑誌に含まれている作品では、“Miss End and Mr. Front are Engaged. It is only known to a few.” (qtd. in Soldo 15) という表現や、Mr Up と Miss Down の駆け落ちの表現 (Crawford 1) がある。当時は、アメリカの開拓の起点が

彼の生家セントルイスからシカゴへとすでに移っていたとはいえ（徳永 14）、その起点の名残が彼の生家があった都市にまだ存在していたと思われる。少年エリオットは、自分の居住地が都市の終着点であると同時に辺境地への出発点でもあることを体験したであろう。そうした体験が、*Fireside* の作品の中で見られたように、対立概念の調和的表現に用いられていたと言える。ハーバード大学大学院生のエリオットは、エール大学からの客員教授である観念論哲学者 Charles M. Bakewell (1867–1957) の 1913 年春の “Kantian Philosophy” に出席する。彼がこの講義のために準備した未発表の原稿 *Three Essays on Kant* の参考図書が、バイクウエルの *Source Book in Ancient Philosophy* である (Cuddy 97n)。この著書では、ヘラクレイトスの “In the circumstance of a circle beginning and end coincide.” (Bakewell 34) という断片的文章にエリオットの下線が施されている (Cuddy 99n)。また、彼はイギリスからの客員教授である哲学者・数学者 Bertrand Russell (1872–1970) の 1914 年秋の論理学を受講する。ラッセルと談話していたとき、彼はこの古代ギリシャ哲学者への興味を示している (Russell 212)。

1924 年以前に書かれた詩は円環構造となっている。この円環構造の基となる詩的表現は、人間の退廃や墮落が繰り返されていることについて思い巡らす語り手たちの言動を伝えている。それは、求めるべき人生について苦悩するエリオットの姿を投影した詩的表現にもなっていることを暗示する。彼は、人生や詩作にかかわる苦悩の精神状態を先のヘラクレイトスの断片的文章から見出したのであると思われる。それは、始まりと終わりの同時存在（始まりに終わりが内在し、終わりに始まりが内在すること）による円環のイメージである。

3

英国国教会への入信という人生の転機が、エリオットにとって、詩作の転機にもなる。前に紹介したモア宛の 1928 年懺悔火曜日付の手紙の中で、彼はキリスト教が人生を満足させることに気づくようになる。その結果として、彼の詩作が再始動する。晩年の彼は、この点について次のように述べている。

I thought my poetry was over after ‘The Hollow Men’; and it was only because my publishers had started the series of ‘Ariel’ poems and I let myself promise to contribute, that I began again. And writing ‘Ariel’ pieces released the stream, and led directly to ‘Ash Wednesday.’ (Lehmann 5)

Faber and Gwyer 社（後に Faber and Faber と社名を変更）が彼に、「エアリアル」詩集の企画のためクリスマス用の詩を書いてほしいと依頼する。その依頼を受けて、彼が書いたのは、“Journey of the Magi”、“A Song for Simeon”、“Animula”である。これらの詩の執筆が契機となって、*Ash - Wednesday* が誕生し、同じ頃に “Marina” がこの詩集の 1 編として発表される。

上述した5編の詩に言及して、エリオットの調和的思考の新たな展開を見てみよう。1927年9月の発表の“Journey of the Magi”は、「マタイによる福音書」第2章1-12節を題材にして、3博士のうちの1人が幼子イエスの誕生を祝う旅を語る。冬の長旅では、ラクダやラクダ使いの連中は反抗的な態度であったし、途中の町や村の人々は好意的でなかった。語り手は、ついに幼子が生まれた地を探し出した時のことを次のように思い出す。

... ; this Birth was

Hard and bitter agony for us, like Death, our death. (108)⁷

イエスの誕生は、後の彼の受難やわれわれの肉体的死のように、激しい痛みを与える印象であったという。博士のつらい長旅は、われわれ人間が精神的再生を目指すための苦難の旅を示唆する。しかし、語り手が出会った幼子の生誕についてのがい苦しみの印象は、エリオット自身の精神的再生への渴望と不安の入り交じった心境を暗に表しているであろう。

3か月後に、“Salutation”(1930年の*Ash-Wednesday*の第2部となる詩)が発表される。ここでは、次のような詩行を引用してみることにする。

Lady of silences
Calm and distressed
Torn and most whole
Rose of memory
Rose of forgetfulness
Exhausted and life-giving
Worried reposeful
.....
Grace to the Mother
For the Garden
Where all love ends. (429)

この詩は、表題からわかるように、*Vita nuova* 第3章でベアトリーチェがダンテに会釈をした挨拶を土台にしている(6-7)。彼女の挨拶に対してダンテは恩寵を感じる。この場面が、沈黙して静寂に包まれた聖女の描写の素材となっている。四つの語(“distressed”、“Torn”、“Exhausted”、“Worried”)はわれわれ人間の罪深さが彼女に与える苦しみを暗示しているし、別の四つの語(“Calm”、“most whole”、“life-giving”、“reposeful”)はその罪深さを受け入れる彼女の包容力の広さを暗示している。われわれ人間は、彼女を記憶することもあれば忘れることもある。そうした行いが、愛の象徴である“Rose”についての“memory”や“forgetfulness”から読み取れるであろう。また、聖女としての“Lady”が“the Mother”に

言い換えられている。“the Garden”は、*Paradiso* 31で歌われる天上界の庭を連想される。そこは、世俗界への愛着が断ち切られた所である。したがって、上の詩行でエリオットは、ベアトリーチェや聖母マリアのような聖女への祈りを描いていると思われる。

エリオットは、母親に宛てた1917年12月30日付の手紙の中で、彼女が生家の寝室の机で書き物をしている写真を見て、先のこと・後のことや、過去・現在・未来を包括した時を意識すると述べている (*Letters, Vol. 1: 243*)。“the Mother”という語からばかりではなく (Ackroyd 21)、この手紙の内容から判断して、彼は“Salutation”の中で世俗的な存在を超越した母親を聖女にまで高めていることも逃せないであろう。聖女に与える苦しみは同時に母親についても暗に言及されているし、聖女の包容力の広さは同時に母親についても暗に言及されているであろう。

エリオットは、1927年の“Shakespeare and the Stoicism of Seneca”の中で、“What every poet starts from is his own emotions.... Shakespeare, too, was occupied with the struggle—which alone constitutes life for a poet—to transmute his personal and private agonies into something rich and strange, something universal and impersonal.” (137)と述べている。彼は、イギリスの劇作家シェイクスピア (1564–1616) の場合を肯定的に論じながら、自らの個人的苦悩を素材にして人間一般の問題を豊かに表現することを暗に目指している。その試みが先の1927年の詩にうかがわれるように思われる。

1928年春、“Perch’ Io Non Spero” (*Ash - Wednesday* の第1部となる詩) が書かれる。この詩の最後の2行は次のような描写である。

Pray for us sinners now and the hour of our death
Pray for us sinners and the hour of our death. (10)

これら2行は、ローマ・カトリック教会の祈祷文で、聖母マリアに罪深い人間の救済をとりなしてくれるように嘆願する内容である (Southam 225)。語り手の願いが人間全体の救済に向けられている。このような表現内容は、1927年の二つの詩の表現内容と同年の評論の記述内容をより明確に示している。

1928年9月、“A Song for Simeon”が公表される。この詩は、「ルカによる福音書」第2章25–35節を題材にして、エルサレムの信仰家シメオンに触れ、次のような場面で終わっている。

I am tired with own life and the lives of those after me,
I am dying in my own death and the deaths of those after me.
Let thy servant depart,
Having seen thy salvation. (110)

老齡のシメオンが死を待つ心構えに言及しながら、エリオットは自分ばかりではなく後世の人々にも思いを寄せて、人間の精神的再生を希求する。このような希求が、先の1928年の詩に見られた表現内容に受け継がれているのである。

4

エリオットはモアに宛てた1929年8月3日付の手紙の中で、長い旅がちょうど始まったばかりのとき、安楽いすにくつろぐつもりはない、と書いている。この時期の彼は人生の再出発を固く決意する。ところが、同年9月に母親が逝去する。翌月に“Animula”が出版される。そこで描かれた次のような詩行を引用してみたい。

The heavy burden of the growing soul
Perplexes and offends more, day by day;
Week by week, offends and perplexes more
With the imperatives of ‘is and seems’
And may and may not, desire and control.
.....
Pray for us now and at the hour of our birth. (111-12)

当時のエリオットは“Dante”（1929年に刊行）を執筆中であった。このダンテ論では、*Purgatorio* 16の原文と彼自身の英訳が引用され、子供の無垢な成長の姿が紹介されることになる（259-60）。1929年の詩の表題は、その引用に見られる“*l’anima semplicetta*”[“*the simple soul*”]（*Dante* 259-60）に由来する。このような子供の成長の姿に比べて、上の詩行の1-5行目は生まれた後の子供が苦悩する姿を伝えている。後者の姿は、どこか暗いイメージが付きまとっている。少年エリオットは厳しい家庭環境の重圧を経験している。母親の逝去の悲しみと、この家庭環境への反発に伴って彼女を苦しめた罪悪感とが、この暗いイメージに含蓄されているであろう。上の詩行の最後行は、ローマ・カトリック教会での祈祷文の“our death”が“our birth”に変更されているので、われわれ人間が新たに生まれてくる子供の幸せを聖母マリアに祈る表現であると同時に、エリオットが新たな旅立ちをする自分自身を母親に祈る表現にもなっているのである。したがって、上の詩行での“us”と“our”は共に、新たに生まれてくる子供と、新たに生まれ変わろうとする彼を暗示しているように思われる。

エリオットの私的感情を含んだ表現は、母親の逝去後に脱稿された *Ash - Wednesday* 第6部にも盛り込まれているであろう。たとえば、同部の終わりに近い次のような詩行を見たい。

Blessèd sister, holy mother, spirit of the fountain, spirit of the garden,

Suffer us not to mock ourselves with falsehood
Teach us to care and not care
Teach us to sit still
Even among these rocks,
Our peace in His will
And even among these rocks
Sister, mother
And spirit of the river, spirit of the sea, (20-21)

聖母マリアへの崇拝に基づいて、懺悔の祈りがさまざまな対象に呼びかけるエリオット独自の表現が示されている。それは、ユニテリアン派から英国国教へ改宗した後の彼の詩作活動の発展として解することができよう。

その一方で、さまざまな対象はすべてエリオット自身と深くかかわりがある。四つの語(“Blessèd sister”、“holy mother”、“Sister”、“mother”)は聖女としての母親を示唆している。“spirit of the fountain”はマサチューセッツ州の漁港グロスター (Gloucester) のエリオット家の別荘から見られた泉を思い起こさせるし、“spirit of the garden”はミズーリ州のセントルイスにあったエリオットの生家を思い起こさせる。“these rocks”は別荘の近くにあった大きな岩の上で母親と一緒にいたことを連想させる。⁸ “spirit of the river”は生家の近くを流れていたミシシッピー河を暗示するし、“spirit of the sea”は別荘から見渡されたニューイングランド海を暗示する。こうして上の詩行は、エリオットが子供時代に一緒に過ごした母親と関連した語で構成されているのである。

初版の *Ash - Wednesday* には “To My Wife” という献辞があったので、上の詩行の “ourselves”、“us”、“Our” はエリオットとヴィヴィアンを暗に指している。そのことは、この詩の第2部で見られた “us”、“our” にも当てはまるであろう。

“Our peace in His will” は、エリオットが “Dante” の中で、*Paradiso* 3 に登場する13世紀イタリアの修道女 Piccarda Donati の言葉 (“*la sua voluntate è nostra pace.*”) を英訳した “*His will is our peace.*” (265) を踏まえている。この言葉についての彼の解説によれば、誰にでも平等であるはずの神の祝福には段階が存在することである (265)。こうした段階論に基づけば、“Our peace in His will / And even among these rocks” は、妻と私がこれから違った苦難の道を歩もうとも、2人に神の祝福があるようにというエリオットの祈りを表している。“Teach us to care and not care / Teach us to sit still” は、2人がこの苦難に耐えかねて間違った道に進まないように、神の導きを静かに待とうとする彼の心境を伝えている。

このように、エリオットは楽しかった子供時代 (“Henry Ware Eliot, Jr.⁹ to Marianne Moore,” 9 June 1936, Marianne Moore Papers; Ackroyd 13) を素材にして、彼女を中心とした静寂な世界を創り出している。彼は母親に、彼と深くかかわる人物(両親、妻)へ懺悔する祈りを行っているのである。

Ash-Wednesday は次のような詩行で締めくくられている。

Suffer me not to be separated

And let my cry come unto Thee. (21)

“ourselves”、“us”、“Our” から “me”、“my” に詩的表現が変化している。この変化から注目されることの一つは、個々の人間が聖母マリアのとりなしにより、浄罪を神へ必死になって祈る表現である。今一つは、エリオット自身が楽しかった子供時代を心の拠り所にして、聖女としての母親の強い仲介によって、自らの浄罪を神に切実に嘆願している表現である。その嘆願には自分の気持ちを妻に理解してもらいたいとする祈りや、自分の人生で苦しませ、当惑させた父親 (Ackroyd 19) への懺悔の祈りも認められよう。こうして、自分と深くかかわる人物 (両親、妻) と和解しようとする彼の調和的思考の深まりが感じられる。

母親の死後の 1930 年 6 月 2 日に、エリオットはモアに手紙を差し出している。その手紙の中で彼は、*Ash-Wednesday* が情緒を訓練するために重要な作品である *Vita nuova* の哲学を現代生活に適用した最初の試みであると書いている。その哲学の一端は、“Dante” の次のような文章から把握できる。

The system of Dante’s organization of sensibility—the contrast between higher and lower carnal love, the transition from Beatrice living to Beatrice dead, rising to the Cult of the Virgin, seems to me to be his own. (275)

エリオットが目にとめるのは、高次の肉体的愛、生きているベアトリーチェ、聖母マリア信仰である。このようなダンテの愛の哲学を模範として、彼は自らの詩で、母親への高次の愛、心の中でいつも生存する母親、聖母としての母親を描写したのであると言えよう。彼の調和的思考による静寂な世界は、こうした一連の母親像に基づいて形成されているのである。

初版の *Ash-Wednesday* は 1930 年 4 月に刊行される。5 か月後に “Marina” が発表される。そこには次のような描写が見られる。

This form, this face, this life

Living to live in a world of time beyond me; let me

Resign my life for this life,... (132)

この詩の表題は、シェイクスピアの *Pericles, Prince of Tyre* で、タイアの領主ペリクリーズの娘として登場するマリーナである。この劇の第 5 幕第 1 場で、船旅をしていた老齢のペリクリーズは死んだと思い込んでいた娘と再会する。エリオットにとって “Marina” の主題

は領主の再会であった (“To E. MaKnight Kauffer,” 24 July 1930; qtd. in Schulman 211)。また、エリオットは2年後の “John Ford” の中で、この劇で領主が娘と再会することに注目する (171)。

このように、エリオットは父娘の再会に感動している。この感動が上の詩行の表現内容に反映されている。語り手はペリクリーズである。生きていた娘の姿が “This form, this face, this life” と描かれ、彼女の世界が “a world of time beyond me” と描かれている。行方不明となっていた娘を発見したとき、彼は現世への執着を諦めさせるほどの無上の歓びに酔いしれている。“Marina” をクリスマス用として書いたとき、エリオットはこの詩にうかがわれるペリクリーズの精神的再生を伝えようとしていると言えよう。

“Marina” は、死んだと思われたマリーナを生きているマリーナへと高めて、これから彼女と一緒にいる歓喜を噛み締めるペリクリーズの気持ちを伝えている。*Ash-Wednesday* では、エリオットは静寂な世界を形成し、その中心に母親がいた。“Marina” を執筆したとき、彼はこのようなペリクリーズの気持ちを通して、心の中で生きる母親との深い絆を再発見したであろう。それは、彼が人間関係や物事を調和しようとする思考により、父親や妻が構成員である静寂な世界をしっかりと築くことになるのである。

おわりに

両親との関係、夫婦生活、過重な仕事などが原因で、1924–25年の頃のエリオットは人生に行き詰まる。この絶望感が、その時期に書かれた彼の詩作に表されている。彼が人生の行き詰まりから立ち直す契機となったのが、1927年に中庸を標榜とする英国国教会へ入信したことである。この出来事は、彼が上述した原因に取り組む契機になり、人間の精神的再生を盛り込んだ1927–30年の詩を発表することへとつながる契機にもなるのである。

英国国教会の特徴である中庸は、子供時代の詩作や生活、学生時代の勉学により身に付いた調和的思考をめぐらすエリオットにとって、人生と詩作の両方で救いになっている。人生上では、これまで背信行為を行って苦しめた両親に対して、また、これからも別々人生を歩むことで苦しめることになる妻に対して、罪を懺悔するのに有益であったと思われる。その際、英国国教会の一員としての彼は、この宗教に見られる聖母マリア信仰に注目し、人間の精神的再生を前面に出した詩的表現に取り入れることを忘れていない。彼は同時に、聖女として母親を高め、その信仰に併せて母親を中心とし、そこには父親と妻が構成員となる静寂な世界を築くことを試みていると言える。その試みの原動力が彼の調和的思考なのである。

注

1. 彼はこの性格を “To James Houghton Woods,” 28 Jan. 1915, *The Letters of T. S. Eliot*, Vol. 1: 91 で言及している。
2. 本稿で引用するモア宛のエリオットの手紙はすべてプリンストン大学図書館のモア資料

による。

3. この派については、次のような解説を参照。
「三位一体論を否定、単一人格の神を主張し、イエス・キリストの神性を認めず、その贖罪を無意味とし、聖霊を神の現存とする教派。人類愛を唱えた社会的な改革にも関心が強い。」(『岩波キリスト教辞典』1144)
4. 両親は息子がアメリカに戻って、哲学を勉強することを望んだし、母親は彼の結婚を優生学的によくないと判断する (“Charlotte Champe Eliot to Thomas Lamb Eliot,” 7 May 1923, *Letters*, Vol. 2: 124)。
5. エリオットはヒュームの罪の概念の影響を受けたことを認めている (Ackroyd 76)。
6. 英国国教会については、次のような解説を参照。
「英国教会、英国聖公とも言う。……英国教会がローマ教皇から独立し、自立した国民教会となるのは16世紀のことである。国王ヘンリー8世の結婚無効宣言がきっかけとなって英国宗教改革は開始されたが、その背景にはウィクリフやロザード派らの改革運動や大陸のカルヴィニズムを中心とする宗教改革の影響がある。続くエドワード6世の時代に、カンタベリー大主教克蘭マーによる礼拝、制度の大胆な改革が次々に実行され、中でも祈祷書 (*The Book of Common Prayer*) の制定は英国教会に独自性を与えた。1558年にエリザベス1世が即位し、英国の宗教改革は完成期を迎える。エリザベスの宗教解決により、英国教会は極端なローマ主義もプロテスタント主義も採らないヴィア・メディア (中庸) の方向性を確立していく。」(『岩波キリスト教辞典』136)
7. “Journey of the Mai”、“A Song of Simon”、“Animula”、“Marina”からの引用はすべて *Poems, 1909-1935* による。
8. エリオットの *Letters I* の248-49頁の間には、別荘の近くにある大きな岩の上で少年エリオットが母親と一緒にいる写真が挿入されている。また、同じ書簡集の536-37頁の間には、別荘とその近くにある大きな岩の写真も挿入されている。
9. Henry Ware Eliot, Jr. (1879-1972) はエリオットの兄である。

引用文献

- Ackroyd, Peter. *T. S. Eliot: A Life*. New York: Simon and Schuster, 1984.
- Bakewell, Charles M. *Source Book in Ancient Philosophy*. New York: Charles Scribner's Sons, 1907.
- Crawford, Robert. *The Savage and the City in the Work of T. S. Eliot*. 1987. Oxford: Clarendon P, 1990.
- Cuddy, Louis A. “Circles of Progress in T. S. Eliot's Poetry: *Ash-Wednesday* as a Model.” *T. S. Eliot, A Voice Descanting: Centenary Essays*. Ed. Shyamal Bagchee.

- London: Macmillan, 1990. 68-99.
- Dante Alighieri. *The Divine Comedy 1: Inferno*. London: Bodley Head, 1939. Trans. John D. Sinclair. 1961. London: Oxford UP, 1975.
- . *The Divine Comedy 2: Purgatorio*. London: Bodley Head, 1939. Trans. John D. Sinclair. 1961. Oxford: Oxford UP, 1971.
- . *The Divine Comedy 3: Paradiso*. London: Bodley Head, 1946. Trans. John D. Sinclair. 1961. Oxford: Oxford UP, 1971.
- . *Vita nuova*. 1992. Trans. Mark Musa. Oxford: Oxford UP, 1999.
- Eliot, Henry Ware, Jr. "To Marianne Moore," 9 June 1936, Marianne Moore Papers, The Rosenbach Museum and Library, Philadelphia.
- Eliot, T. S. *Fireside*. 1899. The T. S. Eliot Collection, Houghton Library, Harvard.
- . *Three Essays on Kant*. 1913. John Hayward Bequest of T. S. Eliot's Library Manuscripts. King's College Library, Cambridge.
- . "[A review of] *Reflections on Violence* By Georges Sorel. Translated, with an Introduction and Bibliography, by T. E. Hulme." *Monist* 27.3 (July 1917) : 478-79.
- . "A Commentary." *Criterion* 2.7 (Apr. 1924) : 231-35.
- . "Doris's Dream Songs." *Chapbook* 39 (Nov. 1924) : 36-37.
- . "Three Poems." *Criterion* 3.10 (Jan. 1925) : 170-71.
- . "The Hollow Men." *Dial* 78.3 (Mar. 1925) : 193-94.
- . *Poems, 1909-1925*. London: Faber and Gwyer, 1925.
- . "Salutation." 1927. *Saturday Review of Literature*. 4.20 (10 Dec. 1927) : 429.
- . "Shakespeare and the Stoicism of Seneca." 1927. *Selected Essays*. 1932. London: Faber and Faber, 1951. 126-140.
- . "Perch' Io Non Spero." *Commerce* 15 (Spring 1928) : 5-11.
- . "To Paul Elmer More." Shrove Tuesday 1928. Paul Elmer More Papers. Princeton U Library, Princeton.
- . "To Paul Elmer More." 3 Aug. 1929. Paul Elmer More Papers.
- . "Dante." 1929. *Selected Essays*. 237-77.
- . *Ash - Wednesday*. London: Faber and Faber, 1930.
- . "To Paul Elmer More." 2 June 1930. Paul Elmer More Papers.
- . "John Ford." 1932. *Selected Essays*. 193-204.
- . "To Marianne Moore." 31 Jan. 1934. Marianne Moore Papers.
- . *Poems, 1909-1935*. 1936. London: Faber and Faber, 1951.
- . "Ezra Pound." *Poetry* 68.6 (Sept. 1946) : 326-38.
- . *The Letters of T. S. Eliot, Vol. 1: 1898-1922*. 1988. Ed. Valerie Eliot and Hugh Haughton. London: Faber and Faber, 2009. 3 vols. 2009-2012.

- . *The Letters of T. S. Eliot, Vol. 2: 1923-1925*. Ed. Valerie Eliot and Hugh Haughton. London: Faber and Faber, 2009.
- Hulme, T. E. "Translator's Preface to Georges Sorel's 'Reflections on Violence's.'" *New Age* 17.14 (14 Oct. 1915) : 569-70.
- Jain, Manju. *A Critical Reading of the Selected Poems of T. S. Eliot*. Delhi: Oxford UP, 1991.
- . *T. S. Eliot and American Philosophy: The Harvard Years*. Cambridge: Cambridge UP, 1992.
- Lehman, John. "T. S. Eliot Talks About Himself and the Drive to Create." *New York Times Book Review* 58.48 (29 Nov. 1953) : 5, 44.
- Power, Sister Mary James. *Poets at Prayer*. New York and London: Sheed and Ward, 1938. New York: Freeport, 1968.
- Powel, Harford Willing Hare, Jr. "Notes on the Life of T. S. Eliot, 1888-1910." Unpublished dissertation Brown U, 1954.
- Russell, Bertrand. *The Autobiography of Bertrand Russell, 1872-1914*. Vol. 1. 1967. London: George Allen and Unwin, 1978. 3 vols. 1967-69.
- Scofield, Martin. *T. S. Eliot: The Poems*. Cambridge: Cambridge UP, 1988.
- Schulman, Grace. "Notes on the Theme of 'Marina' by T. S. Eliot." *T. S. Eliot: Essays from 'The Southern Review.'* Ed. James Olney. Oxford: Clarendon P, 1988. 205-11.
- Shakespeare, William. *Pericles, Prince of Tyre*. *The Complete Works of Shakespeare*. 1905. Ed. W. J. Craig. London: Oxford UP, 1974. 1048-72.
- Sold, John J. *The Tempering of T. S. Eliot*. Ann Arbor, MI: UMI Research P, 1983.
- Southam, B. S. *A Student's Guide to Selected Poems of T. S. Eliot*. 1968. London: Faber and Faber, 1994.
- 大貫隆・名取四郎・宮本久雄・百瀬文晃編. 『岩波キリスト教辞典』. 東京 : 岩波書店, 2002.
- 徳永暢三. 『T. S. エリオット』 (人と思想 102). 東京 : 清水書院, 1992. 全 188 冊. 1966-2009.
- 日本聖書協会改訳. 『聖書』. 新約聖書. 1954. 旧約聖書. 1955. 東京 : 日本聖書協会, 1969.

付記

本論文は『Comparatio』（九州大学大学院比較社会文化学府比較文化研究会）15（2011）：xxx-xliii に掲載された論文を査読により修正したものである。